

幻のマツカワ「天然」稚魚、ついに登別市沿岸で発見！

はじめに

海水魚の中でも小さな卵を大量に産む種類の魚は、仔稚魚期にその大部分が死んでしまうため、この時期の生き残りが資源量の増減に直接影響すると考えられています。そのため、対象魚種が仔稚魚期にどのような場所（成育場といいます）で、どのように暮らしているか（餌や敵となる生物など・初期生活史といいます）その特徴を知ることが、資源管理や沿岸・浅海域の環境保全をどのように進めていくか考える上でとても重要です。

漁業や釣りの対象種として重要なマツカワは、全長 80cm にまで成長する大型のカレイ類です。本種は過去に急速に数が減って漁獲量が激減したため、2006 年以降、毎年 100 万尾の人工種苗放流が実施されており、現在漁獲されているマツカワのほぼ全ては人工種苗に由来します。一方で人工種苗ではない天然海域生まれの個体（天然魚）の初期生活史についてはほとんど明らかになっていません。本種の産卵場は本州の常磐沖（産卵期：2～4 月）と推定されていることから、ふ化した仔魚は北海道太平洋沿岸域に輸送されて、海底付近に生活場所を移し（着底といいます）成長すると考えられますが、遙か常磐沖からどのように北海道までやってくるのかは全くわかっていません。そこでまずは、天然仔稚魚が「いつ・どこに」出現するのかを調査しました。

○登別市富浦湾での小型地曳網調査

調査した登別市富浦湾は登別漁港（富浦地区）に隣接し、栽培水産試験場からは車で 40 分ほどの場所に位置します。この場所は蘭法華岬が太平洋に向けて張り出しており、その中程から漁港の堤防が伸びているため、堤防より内側は波風の影響を受けにくい静謐な砂浜（水深 0～1m）が形成されています。

2023 年 8 月 1 日、この砂浜帯にて小型地曳網（網幅 5m）を海岸線と平行に約 100m 曳いて（写真 1）獲れた魚の尾数を種ごとに記録しました。



写真 1 採集調査風景

○調査結果

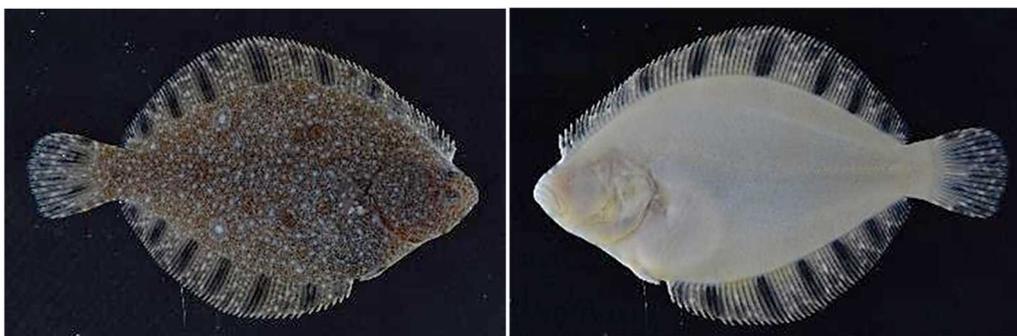


写真 2 登別市富浦湾で採集されたマツカワ天然稚魚
（全長 74.2mm、左：有眼側、右：無眼側）

